

お米育ち豚

日本の米づくりをささえる、お米育ちの豚。

お米育ち豚プロジェクト



お米育ち豚プロジェクト

検索

co-op
コープ

コープみらい いはらきコープ とちぎコープ コープぐんま コープながの コープにいがた コープネット事業連合
食卓を笑顔に、地域を豊かに。

お米育ち豚プロジェクトとは

いま、日本では減反が進められ、多くの田んぼで転作をして畑にしたり、耕すことをやめたりしています。一度、休んでしまった米づくりを、その田んぼで再開するのはとても大変なこと。でも、家畜の飼料にするお米をつくれれば、田んぼを有効に活用し、守っていくことができるのです。さらに、輸入に頼っていた飼料を国産のお米にかえることができ、日本の食料自給率を向上させることにつながります。たべる人も、つくる人も、笑顔でいられる未来をはぐくむため、コープネットグループは、生産者や流通事業者とともにお米を活用する取り組みをひろげています。

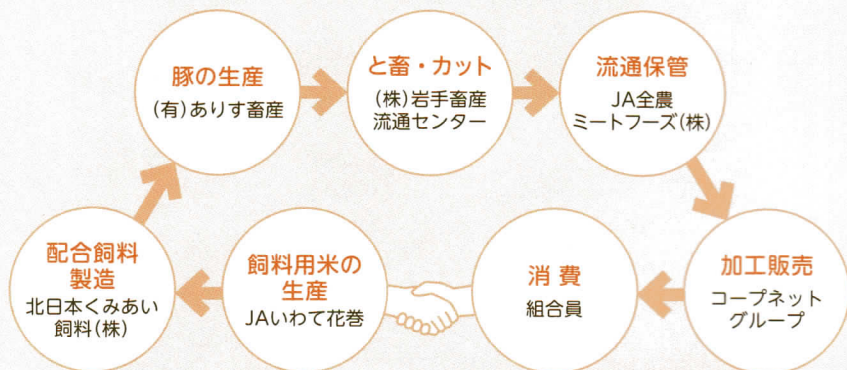
■「お米育ち豚プロジェクト」

お米育ち豚プロジェクトは、生産調整（減反）の対象となる水田で飼料米を作り、そのお米で育った産直豚肉を消費者に提供する、生産者とコープネットグループの協同によるプロジェクトで、2008年からスタートしました。

「飼料用のお米を育てる人」「そのお米で豚を育てる人」「その豚を食べる人」。そして、「食べた想いを育てた人に伝える」。

お米育ち豚プロジェクトは、消費と生産が手を取り合ったフードチェーンを構成しています。

【フードチェーンの図(岩手県での取り組み例)】



このフードチェーンでは、消費と生産が直接手を取り合っています。

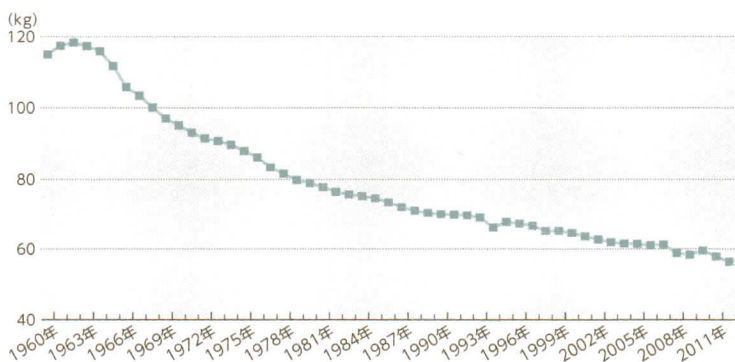


日本を、食卓から元気にしたい

コープネットグループは「日本を、食卓から元気にしたい。」のメッセージのもと、「食料自給力の向上」をテーマに農業の持続可能な発展を目指しています。

お米の国民1人あたりの年間消費量は減少し、これ以上主食で食べるのは大変です。そこで飼料自給率の低い家畜のえさに着目し、お米を飼料に使って豚肉にするまでつなげられないか…。また、放置すれば休耕田になってしまう田んぼで飼料米を作ることによって日本の水田を守る一助になればと考えました。

【年間1人あたりの米の消費量の推移】



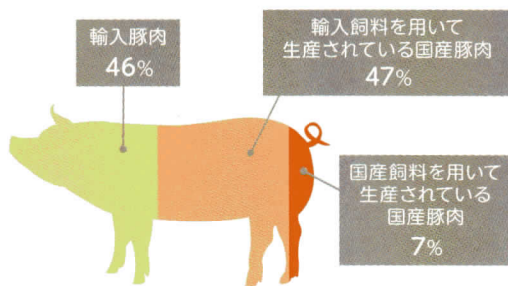
参考文献：農林水産省 食料需給表

米の消費量は食生活の変化などにより、昭和30年代後半をピークに減少しています。

年間一人当たりの消費量

1962年 118kg
 2012年 56kg

【重量ベースの食料自給率】



参考文献：農林水産省 総合食料自給率(カロリー・生産額)、品目別自給率等

お米育ち豚プロジェクトとは、日本を、食卓から元気にしたい

生産や流通事業者と協同した新たなモデル

お米育ち豚とは、飼料米のひろがり

組合員と職員、産地との交流



生産や流通事業者と協同した新たなモデル

2007年	取り組みについて検討開始
2008年	飼料米栽培開始 秋(収穫後)、豚に食べさせ始める
2009年	4月 コープデリ宅配で「お米育ち豚」発売開始 飼料米で育ったたまごの取り扱い開始
2010年	4月 店舗で「お米育ち豚」発売開始
2011年	3月 震災で一時飼料米給与中断 お米育ち豚の生産休止⇒7月再開 6月「稲穂のみのりたまご」をCO・OP商品化 7月「CO・OP はぐくむたまご赤玉」で飼料米10%配合開始
2012年	震災1周年 お米育ち豚の販売を通じて、いわて学び基金へ寄付する活動を実施
2014年	PED(豚流行性下痢)の影響で豚が死んでしまい、安定した供給ができなくなる

飼料米に取り組むために、お声がけしたのは「CO・OP 特別栽培米 岩手ひとめぼれ」を通じてつながりのあった岩手県「JAいわて花巻」。

田んぼをなんとかしなければ、という熱い思いで、生産者やJAだけでなく、飼料を作る人、豚を育てる人などたくさん関係者（JA花巻、(有)ありす畜産など）が協同しました。



2008年5月の協定調印式





【豚を育てる人】 (有)あり畜産(岩手県気仙郡住田町) 代表取締役 **水野 雄幸さん**

農家さんの高齢化などで田んぼが少なくなり、何とか畜産業として協力できないかと模索していました。そこにこの話が打診され、すぐ請け負うことにしました。

国内でエサも含めて豚を安定的に生産できるようにして、50年、100年継続できる事業を目指しています。

農事組合法人「遊新」(岩手県花巻市) 組合長 **高橋 新悦さん** **【お米を作る人】**

水田なので米を作りたいけれど、現状では生産調整は必要です。やはり、飼料用米の生産が、経営として採算がとれることが重要です。この地域で、みんなが一年間通して農作業ができるようにして、将来に向けて農業が継続できる環境を作りたいです。



【肉の流通保管を行う人】 JA全農ミートフーズ(株) **船引 守一さん**

生産者・農協は一反という単位、飼料では1トンという単位、食肉はグラム単位で(判断の基準や言葉が)違うことに不安もありましたが、つながることで新しいしくみが生まれます。

私も農家出身ですが、水田の有効活用に少しでもかかわれることが嬉しいです。

コープネット生鮮調達管理部 **小川 明彦さん** **【コープで豚肉を調達する人】**

お米育ち豚の取り組みは多く人の力(思い)が詰まった取り組みです。だからお米育ち豚を利用いただく組合員さまの期待を裏切らないように安定した品質でお届けする事が重要です。生産者のみなさんと流通保管をする人々と力を合わせ品質の安定化を行っています。美味しいお米育ち豚を是非ご利用ください。



お米育ち豚とは

2008年のプロジェクトの開始後、「お米育ち豚」は組合員の皆さまから非常に高い評価をいただいています。

【「お米育ち豚」の特徴】

【肉質について】

脂身がさっぱりしていて、甘みがある。
肉質柔らかく、くさみがない。
パサつきがなく、ジューシー。



【豚の生産について】

豚の全肥育期間約180日のうち、出荷前約2ヶ月間、トウモロコシの約10%の飼料米を配合したエサを給餌。

飼料米（玄米）を粉にして与えています。豚の胃はデリケートなので、玄米のままではうまく消化しないのです。豚はストレスに弱いのですが、豚が元気に気持ちよくエサを食べ、のびのび生活をしてもらえる環境をつくることで、おいしい豚肉ができます。

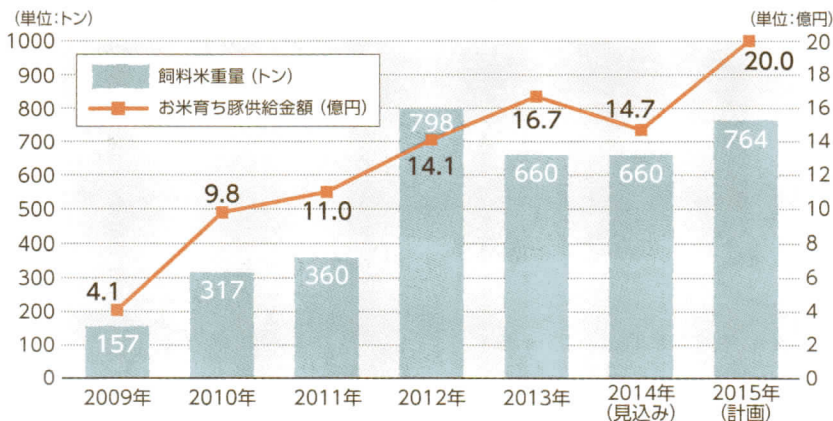


飼料米のひろがり

2009年よりお米育ち豚の販売が開始されました。

岩手県をはじめ、長野県でも肥育され、現在では岩手県、長野県、群馬県、千葉県、茨城県の5県に広がっています。

飼料米量とお米育ち豚供給金額の推移



また、現在は豚だけでなく、鶏のえさに飼料米を混ぜ、「純和鶏お米育ち」「CO・OP 稲穂のみのりたまご」を販売し、日本の食料自給力向上を目指しています。



純和鶏お米育ち



CO-OP 稲穂のみのりたまご

CO-OP はぐくむたまご赤玉



お米育ち豚プロジェクトとは、日本を、食卓から元気になりたい。

生産や流通事業者と協同した新たなモデル

お米育ち豚とは、飼料米のひろがり

組合員と職員、産地との交流



組合員と職員、産地との交流

ただ単に、豚の販売だけでなく、産地を実際に訪れることで産地の想いを他の組合員や職員に広げています。

毎年、田植えや稲刈り、2014年度からは草刈り体験を通して、実際に田んぼに入って農業体験をしています。

お米育ち豚プロジェクトとは、日本を、食卓から元気にしたい。



参加者の言葉

- 消費者、生産者がともにお互いを思い合って成り立っているコープはすごい。自分が大きな組織の1員ということ始めて実感できた。自信を持って多くの人にコープのことを伝えていきます。
- 岩手の生産者の方はとても気さくで。そんな方たちに支えられ作られたものが届いているのだと思うと、とてもウキウキワクワクします。また、風景や作られた過程や生産者の方の顔がその奥に浮かんできます。



生産や流通事業者と協同した新たなモデル

お米育ち豚とは、飼料米のひろがり

【飼料米を管理する「花巻東部カントリーエレベーター」】



「花巻東部カントリーエレベーター」は収穫した主食米や飼料米、小麦などの貯蔵・管理・仕分けを行う施設です。

質の高い安全なお米を供給するために、不良米や屑米、ゴミなどを分別する設備が整っています。

組合員と職員、産地との交流